

「御供田八幡神社と安楽寺」

路地沿いの旧跡をめぐる



前回紹介した雨水貯留施設（古堤街道に沿って東へ歩いていくと、右手にはまじんじや八幡神社の社殿が見えてきます。当社は元禄年間（17世紀末頃）に石清水八幡宮（現・京都府八幡市）から御供田村の氏神として勧請されたと言われています。境内には、創建後間もない元禄12年（1699）の銘が刻まれた灯籠があります。

八幡神社の鳥居を出て南へ40メートルほど歩いていくと、細い路地に突き当たりします。そこから東へ向かうと、すぐに獅子吼山安楽寺が見えてきます。当寺は、阿弥陀如来木像を本尊とする浄土真宗本願寺派の寺院で、創建年代は不明ですが、少なくとも宝暦年間（18世紀中頃）までには本堂や庫裏などが整備されていたようです。門の東側の地藏堂の前には、「願主 角堂 米安」と刻まれた安政3年（1856）建

立の願掛け碑が立っています。願主の米安は当時物流拠点として栄えていた角堂浜で活躍した人物だったのかもしれません。住道の地名の由来となった角堂の名を今に伝える貴重な文化財です。

さらに路地を東へ向かい、旧家の前を通り抜けると、正面に再び恩智川の堤防が見えてきます。堤防の手前で右手に曲がると、御供田公園に入ります。公園の中央には平成6年に開かれた屋根付きの立派な土俵があります。この土俵は、地元の相撲大会のほか、大阪場所の時期には現役力士の稽古にも利用されています。また、公園の北側には、江戸時代初めの大坂城再築工事の際に切り出されたといわれる自然石がありますが、この石の由来については次回紹介します。

（生涯学習課）



御供田八幡神社



「角堂」と刻まれた碑



御供田公園の相撲場